漁業士会

浜風 HAMAKAZE

11.7 vol.3
発行：青森県漁業士会
青森県漁政課内
TEL 0177-34-9587
編集：「浜風」編集委員会
印刷：東北印刷工業㈱

漁業士の皆様へ

青森県水産部長 玉 熊 良 悦

本年4月1日に前任者の佐藤水産部長から職務を引き継ぎました玉熊です。前任者同様よろしくお願いいたします。

青年漁業士並びに指導漁業士の皆様方には、それぞれの地域において漁村活性化のためご活躍のことと拝察し、深く敬意を表します。

本県では、平成9年3月に制定しました「新青森県水産振興プラン（計画期間：平成9年度から平成18年度）」に基づき、資源管理型漁業の推進、栽培漁業の強化、担い手育成事業の推進、漁業基盤の整備、漁場環境の保全、流通機構の整備等の政策を展開し、漁業の活性化に取り組んでいるところであります。

一方、漁業者の立場からみますと、これからの漁業は、獲った魚をいかに高く売るかが重要になって来ると思います。一つは、持続的に安全で鮮度の良い魚を水揚げし、地域に根ざした青森ブランドを作っていくことです。例えば、「関サバ」、「城下ガレイ」のようなものがこれに当たると思います。また、活魚で出荷することや、何らかの加工を加えて、価格を上昇させる等のアイデアが必要で、例えば、カワハギでは皮を剥いで出荷すれば今ではかなり高額で取引されますし、ブナザケも燻製にすれば高額で販売することができます。他方、脇野沢等で行われている焼き干も安いイワシを高額で売る方法の一つであろうと考えられます。

漁業士の皆様方には、地元において工夫を凝らし、銘柄や、特産品づくりに挑戦していただきたいと思います。

皆様方には体をいとわれ、今後の益々のご活躍を期待しています。

第2回 森と海のフェスティバル

6月20日

たくさんの人が集まりました。

水産庁濱田遊漁・海面利用室長の「漁業と遊魚の共存について」講演要旨

平成11年5月14日に開催された平成11年度漁業士会総会の席上行われた講演の要旨についてまとめてみましたので今後の漁業活動の参考にしていただければと考えています。

1．遊漁の現状について

近年の余暇時間の増大、自然志向の高まりから、海面遊漁者数は延べ3千7百万人（平成5年）に上り、遊漁は多くの国民が親しむレクリエーションとして定着化し、今後も増加が予想される。

このような中、遊漁船業は、漁家経営の兼業の一つとして重要な役割を果たし、地域の特色を生かした産業ともなっている。

全国の遊漁による釣獲量は、29,500トン／年（1人あたり5.1kg）となり、魚種別ではマアジ3,410トン、サバ類3,310トン、ブリ類2,530トンの順になっている（平成9年）。また、青森県における遊漁船業による釣獲量は485トン／年でスルメイカ345トン、カレイ類45トン、アイナメ18トンの順となっている。

2．遊漁に関係する制度等の現状

遊漁に対してこれといった規制はないが、例えば茨城県では30㎝未満のヒラメの採捕禁止、神奈川県等では定置網周辺での他漁業、遊漁の禁止を海区漁業調整委員会指示として出している。また、遊漁団体との漁場利用協定を結んだり、海面利用協議会等で協議を行っている地域も存在する。

3．漁業と遊漁との資源・漁場利用調整（共存）のために

漁業調整規則等のルールを知らない遊漁者がまだ多く、普及啓発が不可欠で、遊漁者と漁業との問題解決には十分な実態等の把握が必要である。

資源の増大は、漁業者、遊漁船業者、遊漁者共通の利益であり、資源管理に関する漁業者の取組みについて徹底した広報と遊漁者との交流を通じた情報提供が必要で、青森県が行った遊漁者へのアンケート結果によれば遊漁者の95％が「資源管理が行われれば協力する」と回答している。

まず、遊漁者、遊漁船業者の組織化が不可欠で、例として、漁港管理者が漁港にプレジャーボートの係留を許可し、遊漁者の連絡体制づくりから組織化に繋げている。

遊漁者の組織化が進んだ段階では漁場利用協定等の締結の方向に持って行くとともに、漁業調整委員会指示の裏打ちが図れれば望ましい方向と言えよう。

これらの取組みの促進に当たっては、漁協、漁連が積極的な役割を果たすことも重要であるし、また、県市町村行政の応援も必要である。

（記：青森県漁政課　田 村 眞 通）

□総会報告□

◇　　◇

平成11年度青森県漁業士会総会が5月14日に会員及び漁協等関係者83名の出席のもとに、青森市のアラスカ会館において開催されました。

総会では平成10年度事業及び収支決算報告をはじめ、全議案が原案どおり可決されました。

また、総会終了後、水産庁遊漁・海面利用室長の濱田研一氏による講演会が行われました。

◇　　◇

支部とぴっくす

東青支部

東青支部よりトピックスを送ります。

平内町茂浦の1人の漁師さんの話を聞きました。

彼はホタテ養殖業に従事して12年になります。その間、ホタテのへい死、価格の低迷等があり、副収入として油目カゴ漁を始めました。

最初は養殖施設を利用したり、沿岸沿いに入れたり、様々試みました。その結果、油目の習性、移動、産卵期、水温との関係などがあるように思います。

今までの経験から5～10月までは浅場の水深約10～20メートル海域で多く取れます。また、この時期は、メバル、平目も取れます。平目に関しては、カゴの入り口を「楕円形」に改良したカゴの方が多く入っていました。

時期的に海も時化が少ないため、ホタテ本業の合間を見て、毎日のようにカゴを上げに出ます。漁も今の時期が1番多く、1日で40～50kg取れるときもあります。

そして、11～4月まで水温が低いためか沖の深場水深約30～50メートル海域に移動して漁をしています。この時期にはタコなども取れることもあります。また、油目に関しては、高価な時期でもあります。1kg2,500円で出荷したこともあります。

このように油目カゴ漁は年中通して漁ができ、刺し網などより手間がかからないすばらしい漁法だと思います。それと、カゴを様々改良して作ることも楽しみの一つです。

現在、カゴ数は大小あわせて約100ケ。

年収入　250～300万。

ホタテの年収は想像にお任せします。

（東青支部・逢坂喜八）

日本海支部

鰺ヶ沢漁協では、このほど漁業者、漁協職員、県・町の関係機関等による総勢29名で、札幌中央卸売市場の視察を行いました。

これは、市町村や漁協等が実施するマーケティングや販売促進等の活動に対して、国・県が支援する「資源管理型漁業県産魚販売促進事業」の一環として実施されたものです。

早朝、活気に満ちた市場内を一通り見学した参加者たちは、その後に設けられた市場関係者との質疑応答の中で、「鮮度保持のより良い方法は？」、「消費者のニーズはどのように変化しているのか」等、率直な意見の交換が行われました。

視察を終えて、これまでの「いかにたくさんの魚を獲るか」から「獲った魚に付加価値をつけていかに高く売るか」という考え方への転換の必要性を改めて実感しました。

さて、鰺ヶ沢漁協では前述の事業を通して、鰺ヶ沢の主要魚種であるヒラメ、ヤリイカについて、鮮度の向上や魚箱の改良、漁協シールの作成等を行い、ブランド化を図ることにより魚価の向上につなげたいと考えています。

そのためには、生産者である私たち漁業者が、消費者のニーズをより敏感に肌で感じ取り、一丸となってこれに対応して行く努力が必要だと思いました。

その意味でも、今回の視察は大変意義深いものであったと思います。

（日本海支部・八木沢健一）

むつ支部

平成11年管内交流会について

6月10日（木）易国間漁協において、平成11年度の管内交流会が開催されました。この交流会には、会員相互交流に23名が参加したのをはじめ、地元、風間浦村役場や易国間漁業協同組合関係者を含めて47名が参加し、盛大に行われました。

交流会は、漁業管理課の永山主幹による「漁業取締活動の現状と課題」と題する講演のあと、易国間漁業研究会によるコンブ養殖試験の説明及び風間浦村立アワビセンターの視察などを行いました。

このあと、風間浦村役場や易国間漁協、同研究会の好意によって開催された懇親会には、多数が参加し、これからの漁業振興策や各種増殖の振興を図るにはどうすべきか等について有意義で、かつ、熱心な討議が行われました。

尻労小学校水産教室について

6月26日（土）尻労漁協荷さばき場において、地元の小学校生40名を招いての水産教室が行われました。この水産教室には、尻労、猿ヶ森地区の漁業士を中心に尻労漁協職員、同研究会、同婦人部及び教職員、ＰＴＡ会が参加（総計80人）し、盛大に行われました。

水産教室では、はじめに魚の見分け方を知ってもらおうと川端組合長や小笠原会長、向井研究会長らがヒラメ、アブラメ、カレイ類の特徴を説明しました。その後、児童たちは、実際にカレイ等に触って感触を比べていました。

水産ゲームでは、ホタテやイカをさばく速さや正確さを競い合いました。

海上遊覧では、石田勝信青年漁業士の第3漁幸丸に乗船し、大型定置網漁場などを回って地元漁業の仕事内容などについて理解を深めました。

その後、児童たちは関係者たちと一緒に、焼いたホタテやイカなどを味わいながら交流を深めました。（むつ水産事務所）

三八支部

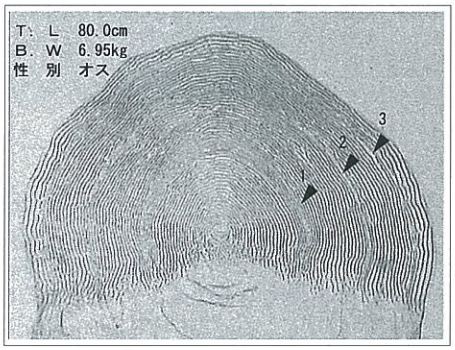
三八支部では、さる6月10日に三八漁業士会総会を開催しました。総会では今年度の活動計画などの協議が行われましたが、今年度の活動の目玉として岩手県北部漁業士との交流会が企画されています。岩手県北部漁業士との交流会は過去に2回実施しており、前回は平成9年度に行われ、磯根漁業と漁船漁業の2分科会に分かれて活発な討議が行われました。三八管内と岩手県北部は漁業形態も似ており、漁場管理や漁業技術など互いに参考になる部分が多いため、今年度も実り多い交流会になることが期待されます。（八戸水産事務所）

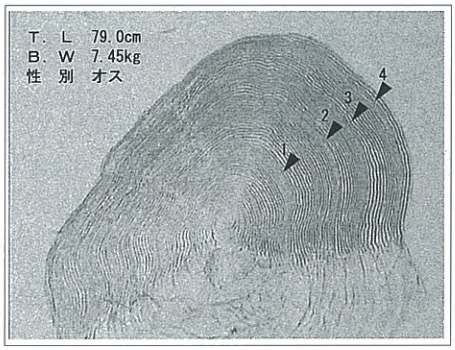
三沢にあがったトキシラズについて

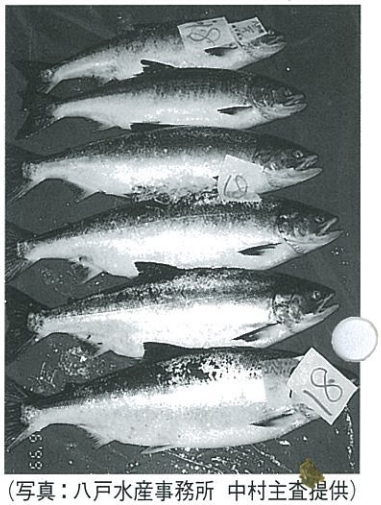
青森県水産試験場　主任研究員　菊 谷 尚 久

5月下旬に三沢市漁協の定置網に「トキシラズ」と呼ばれる4～7kg台の季節はずれのサケが1,500尾前後入網しました。このサケは秋に漁獲される“秋サケ”と同じ種類であり、標準和名はシロサケです。「トキシラズ」は主として北海道太平洋沿岸で春から夏にかけて漁獲される索餌回遊中の未成熟のサケです。本県太平洋沿岸でも年間数十尾程度の漁獲はありますが、これほどの漁獲はきわめて珍しく、海流の関係で本県沿岸に回遊してきたものと考えられます。未成熟で漁獲されるシロサケとしてはほかにも「ケイジ」や「メジカ」が知られています。

「トキシラズ」の生態については不明な点もあり、アムール川周辺に遡上するサケだという説もありますがまだ確定されておりません。水産試験場で体重7kg台のトキシラズ2尾を調査したところ、年齢は3年魚1尾、4年魚1尾（ともに♂）でした。現在幽門垂の計測等を行っており、本県沿岸に来遊する秋サケと比較しているところです。







（写真：八戸水産事務所　中村主査提供）

今年のホタテガイの生育不良について

青森県水産増殖センター　ほたて貝部長　小 坂 善 信

ホタテガイの生育には餌と水温が大きく関与します。餌となる植物プランクトンが増えないとホタテガイも成長していきません。ホタテガイの餌である植物プランクトンが増殖するためには、上層に豊富な光と下層に多く分布する栄養塩が必要です。

今年の冬から春にかけて、陸奥湾の水温は例年にない推移を示しました。平年であれば、冬は上下層で水温差がなくなり、上下層の海水が混合し、それとともに海底の栄養塩が上層に供給されます。ところが、今年は3月中旬以降に高塩分、高水温の津軽暖流水が海底を這うように陸奥湾に入ってきて、上層の陸奥湾固有水とは混合しませんでした（図1）。この津軽暖流系の水は塩分が高く重かったために、上層には上がらずに海底に居座った形となりました。このため、海底の栄養塩が上層に供給されずに、植物プランクトンの増殖が抑えられてしまいました。

さらに、ホタテガイの生育は成熟によっても抑制されます。ホタテガイの成熟時期である2月から3月にかけて、産卵の引金となる水温上昇がなかなか見られなかったので、今年は生殖巣が例年よりもよく発達し、産卵もかなり遅れました（図2）。ホタテガイは卵を作るのにも壊すのにもかなりのエネルギーを使います。長期間産卵されずに体内に卵が残っていると、貝自体の成長に使うエネルギーを卵のために使ってしまいます。

このように、今年のような極端に寒い冬は人間にも厳しい年でしたが、ホタテガイにとっても受難な年となりました。

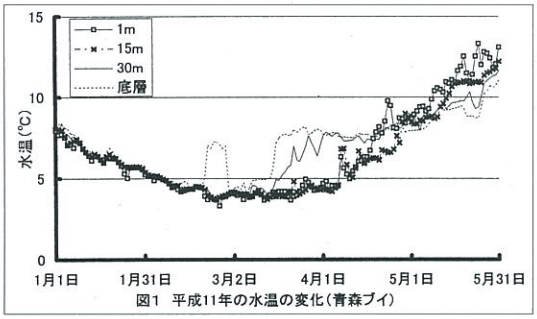


図1　平成11年の水温の変化（青森ブイ）

（図1）

（図2）

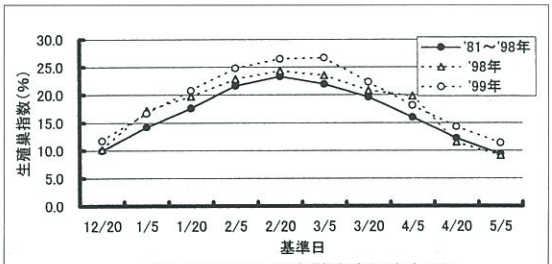


図2　養殖2年貝の生殖巣指数変化（全湾平均）

編集後記

今回から4人の編集委員（東青・逢坂喜八さん、むつ・小笠原清春さん、日本海・八木沢健一さん、三八・荒木田政信さん）にお集まりいただいて内容の検討を行いました。次号には漁業士の皆さんの読みたい記事をもっと増やしていきたいと思います。

（記：青森県漁政課　斎 藤　彰）

連絡先：むつ支部　0175－22－8626
三八支部　0178－27－5858
東青支部　0177－74－0772
日本海支部　0173－72－4300